【コメント】

教育において求められる能力から コミュニケーションを考える ―イランと日本を比較して―

森田 豊子
鹿児島大学

はじめに

今回のシンポジウムで筆者の役割はイラン人文学研究者のザフラー・ターヘリー氏の発表のコメンテーターであった。彼女が日本人にペルシア語を教える時に気がついたこととして取り上げたトピックは、否定疑問形に対する返事の仕方についてであった。例えば「あなたはそこに行っていないのですか？」に対する返事は、日本語の場合、行っていなければ「はい、行っていません」であり、行っていれば「いいえ、行きました」になるのに対して、ペルシア語では「na（いいえ）、行っていません」、「bale(はい)、行きました」となる。日本人が反射的に「母語の翻訳」をしてしまう場合に起こる間違いであり、このような間違いは、同様の構造を持つ英語でも見られる。ターヘリー氏は、長年ペルシア語を学習してきた人であっても、会話においては反射的に日本語の翻訳をして間違えるケースがあることに驚いていた。

しかし、別の角度からこの発言を見ると、読み書きが自在にもかかわらずに会話において間違いをするペルシア語学習者に彼女が驚くということが、筆者にとっては興味深いことであった。これは筆者がイランで感じた実感と一致する。つまり、少なくとも筆者が日本で学生として外国語を学ぶときには、アルファベットの書き方から始まる読み書きの学習から始め、読み書きがある程度自在になってからようやく会話習得へと進むという方法が一般的であった。イラン人である彼女は違和感を感じていた。イランでは、外国語を学ぶ人の多くが、まず会話の学習から始めて、その後読み書きを学習している。イラン人

が日本語を学習する場合、他の外国人と同様に無数にある漢字という難関が存在するという特殊な事情はある。しかし、日本以外の国であってもイラン人の多くは、まず会話能力が先に上達して、その後読み書き能力へという順番になっている。逆に、日本からイランへ行った日本人留学生に対して「これほど読んだり書いたりできるのに、どうして話せないのか？」とイラン人に不思議がられることがよくある。シンポジウムにおいての発言にもあったが、このような違いは、日本人が文書のやりとりによるコミュニケーションをより重要だと考え、読み書きの能力を優先するのに対して、イランの文化では文書のやりとりだけではなく、まず電話や直接会うことで直接会話することによるコミュニケーションを重視しているという違いがあると考えられる。

第1節 イランにおける教育の方法

イランの学校教育におけるイランの授業の進め方には、上記のようなイランの文化が反映されている。イランで一般の公立学校で行われている授業の方法は、（教科書を）「教える」、（教科書を）「読む」、（教科書の問いに）「答える」の三段階に分かれている[1]。「教える」段階では、教師は児童・生徒といっしょに教科書を読み、その内容について説明し、理解を促す。そして「読む」段階では、家庭においてそれぞれの児童・生徒が内容を完全に記憶するまで読み込む。最後に「答える」段階で教師は児童・生徒に質問し、完全に記憶した教科書の一部をまるごと口頭で回答させる。近年増加している私立学校などでは別の教育方法がとられることがあるものの、いわゆる伝統的な教育方法として教えられている形は、以上のようなものである。そこでの学習の目的は「教科書を憶えて、それを口頭で言えるようになる」ということである。

イランに近代学校教育が導入される以前には、初等教育はマクタブと呼ばれる、地域にある小さな教室で行われていた。そこでは、コーランをテキストとした読み書きなどの教育が行われていた。まずコーランを声に出して読み、それを暗記することから始められた。イランにおける教科書を暗記することを基本とする教育のあり方は、ここに

1　森田豊子「イラン・イスラーム共和国の学校教育における教育方法とその変化」『中東イスラム・アフリカ文化の諸相と言語研究』大阪外国語大学, 2001年, pp. 343–354.

基礎がある。

基本となるテキストを徹底的に暗記し、それを口頭で自由自在に言えるようになることがイランの学校教育の基本において最も必要とされる能力である。イランの学校教育においては、そのような能力を高めるために教科書を読み、記憶し、それを口頭で発表するという訓練が繰り返し行われていた。これは、日本でよく批判される詰め込み教育とは異なっている。日本の詰め込み教育の例としてあげられるのは、歴史の年代や円周率などの小さく細切れにされたバラバラの知識を脈絡なく憶えるということである。イランの場合はひとつの文章、ひとつのパラグラフをその意味の解釈やコンテクストも含めて丸ごと憶えることである。ひとつの「型」として頭に刻み込まれたこの知識は、必要な場面においてその「型」を頭の中の引き出しから出して利用するために身につけることを要求される。

したがって、常に原稿を見ながらスピーチをするようでは、イランで知識人として尊敬されることはない。ウラマーと呼ばれるイスラーム法学者がテレビで説教をするときも、政治家が演説するときも、基本的には原稿を持つことなく、自分の頭の中の引き出しにある様々な「型」を利用したレトリックをちりばめて話を組み立て、よどみなく話が続けられる。また、そのようなことのできる能力のある者が知識人として高い評価を受けることになる。

第2節　「型」の作り方

イランにおいて、このような「型」の典型的な例としてあげられるのは、やはり詩である。イランの人々は、知識人であるなしに関わらず詩を読み、詩を「型」として自分の頭の引き出しにしまっておき、必要なときに会話の中にその詩の一節を言うことによって自分の言いたいことを簡潔に、スマートに表現しようとする。イランの詩は哲学的にも深い内容のものが含まれており、また、複雑な日常世界を説明するのに必要な知恵が凝縮している「型」である。

筆者は、イランのテヘランである女子中学校で授業を観察しているときに「詩のしりとり」という遊びを見たことがある。イランの詩は、一行（ミスラー）が半句、二行（バイト）で対句となっている。「詩のしりとり」とは一人が知っている詩の中の一部の対句を言うと、次の人がその最後の言葉や文字から始まる対句を言うという遊びである。そのしりとりが次々と続くのを見て「一体彼女たちはいくつ

の詩を憶えているのだろう」とたいへん驚いた。筆者は日本で百人一首を憶えるという宿題を課されたことがあり、たいへん苦労した経験がある。現在ではその多くを忘れてしまっている。日本ではイランのように日常的に会話の中でその一節が使用されたりすることがほとんどないからであろう。また、百人一首を憶えたことを確認するために行われたテストは、「括弧の中に適当な単語を書き入れよ」であったり、「この言葉の意味は何か」であったりという、細かな部分を問うものであったという記憶がある。イランでは、そのような問い方がされることはほとんどなく、詩を口頭できちんと詠むことができるのかどうかが重視される。

イランでは質問に対して反射的にきちんとした文章の形で答えること、それが教育において求められていることである。そのために教科書の内容を丸ごと記憶し、必要に応じて口頭でそれを自在に引き出せるように訓練する。それは、テキストを「型」として頭の中に形作り、その「型」を会話などにおける口頭でのコミュニケーションで使用するための訓練である。

むすびにかえて

以上のような理由から、今回のシンポジウムにおいてターヘリー氏が「質問に対する回答の仕方」について注目することは、イランの文化的背景から自然なことである。イランの教育において重視されるのは、会話という口頭におけるコミュニケーションで、適切な受け答えのできる能力である。自分の中で形成された「型」を使って、適切な言葉を妥当な場所で即座に回答できる能力である。それは、知の多くを、書かれたものから取り入れてきた日本とは異なっている。これから異文化間のコミュニケーションを考えるにあたっては、このような言語習得の背後にある目に見えない文化の違い、またそれが教育という分野においてどのように形成された文化の違いなのかについても考慮する必要があると筆者は考える。